

松山幸生先生講述

全33回--4

2021年11月

写者

小原靖夫

# ヘブライ人への手紙に学ぶ

1996年1月から1998年10月

## 第4回 神の御子イエスの受難と栄光

### 第2章5節から9節 救いの創始者

- ⑤神は、私たちが語っている来るべき世界を、  
天使たちに従わせるようなことはなさらなかったのです。
- ⑥ある箇所、次のようにはっきり証されています。  
「あなたが心に留められる人間とは、何者なのか。  
また、あなたが顧みられる人の子とは、何者なのか。」
- ⑦あなたは彼を天使たちよりも、わずかの間、低い者とされたが、  
栄光と栄誉の冠を受け、
- ⑧すべてのものを、その足の下に従わせられました。」  
「すべてのものを彼に従わせられた」と言われている以上、  
この方に従わないものは何も残っていないはずです。  
しかし、私たちはいまだに、すべてのものがこの方に従っている様子を見ていません。
- ⑨ただ、「天使たちよりも、わずかの間、低い者とされたイエス」が、  
死の苦しみのゆえに、「栄光と栄誉の冠を受けられた」のを見ています。  
神の恵みによって、すべての人のために死んでくださったのです。

ヘブライ人への手紙を学び始めてもう4回目になります。(1996年4月7日がイースターであった)  
この書物を読んでいくたびに思うことは、この著者はイエス・キリストというお方を語る  
にあたって、非常に深い洞察力を駆使し、様々な形でこの方を誤りなく伝えようとする熱  
心さというようなものを持っていると強く感じるのです。(その熱心さを更に更に熱心に語られる松山  
幸生先生のお姿を思い出します)

「ヘブライ人への手紙」が書かれた背景の復習をします。この手紙は信仰が後退しつつあった第2世代のユダヤ人キリス  
ト者に宛てて書かれています。彼らは、迫害と誤った教理に直面し、ユダヤ教に回帰しようとしていた。誤った教理と  
は天使礼拝。紀元1世紀のユダヤ人たちは天使(御使い)を守護天使とするような過度な天使礼拝が流布していた。キリス  
トが天使に勝るということを婉曲的に漸次的に宣べて、彼らを励まし勧告していく。勧告は5回あって、その第1回が  
前回の2章1節「押し流されない」でした。

先ず1章でこの著者は、御子の「先在性」(先に存在していらっしゃった、プレイクジス  
テンスといわれます)を語り、天使に対して非常な「優越性」をもったお方であることを  
述べています。

そして2章の1節から4節の中で、特に今回も含めてですが、御子と天使との本質的な相違を明らかにしながら、御子の働きが何であったかという核心について述べている、そのように見ることができると思います。<sup>104</sup>

前回ひもときました1節から4節までの部分では、天使たちを通して語られた律法より遙かにまさる大きな救いが、御子と弟子たちと神御自身とによって示され、しかも証しされているということが述べられていました。

今日の5節以下が「救いの創始者」という、私たちが読んでいく時にスッキリと捉えられる見出しで書かれているのは感謝なのですが、むしろ、この箇所では、救いの内容として「神の御子の受難と栄光」というものが、中心的に述べられていると言ってもよいだろうと思います。

私どもは過ぐる聖日に主のご復活を祝い(1996年4月7日)、その前の1週間を受難週として過ごしたわけですが、この受難の問題は一人ひとりが大変深く、御言葉を通して味わってきた箇所であろうかと思えます。そんなことを思い合わせながら今日はこの御言葉について心を向けてゆきたいと思うのです。

アイデンティフィケーションとは

今日の箇所のお話に入ります前に、一つのことを申し上げてみたいと思います。

アメリカのユージン・シュナイダーという人が「伝道」ということについて書いている本の中に大変興味深い言葉があったのです。正確に翻訳できるかどうかわかりませんが、私なりに翻訳してみますと、

「伝道上の中心的な問題は基本的に二つある。その一つはコミュニケーションという問題であり、このコミュニケーションというのは、どのようにして自分の意思を相手に伝えるかということです。第二番目はアイデンティフィケーション、即ち『相手と一つになる』ということがなければ伝道はできない」

と書いてあるのです。

とかく、私たちはコミュニケーションに関してはよく勉強します。

しかし、アイデンティフィケーションについては、「自分自身の身を相手側に置かなければならない」わけですから、なかなか難しく、これがなされていないことが多い。従って伝道は効果を上げ得ないのだということを書いているわけです。

私は色々なところで、福祉という事柄との関わりの中で御言葉を学んでまいります時には、「相手の立場に身を置いて歩まれ語られたイエス」ということをしばしば語って来ています。相手の目の高さに、自分の目の高さを置くことの大切さを語っているわけです。

(この書簡はユダヤ人宛に出されていますから、旧約聖書の立場に身を置いて語り始めます)

この聖書の箇所でも、今のシュナイダーの述べた言葉で言えばアイデンティフィケーションということが問題になっているのだと思います。やはり相手に言葉を伝える時、あるいは相手に慰めを与える時には「相手の立場に自分の身を置くこと」が欠かすことのできない要素なのではないだろうかと思うのです。

受肉について

今日のこの5節以下の箇所でも、その問題（アイデンティフィケーション）が中心になって語られています。一般に神学用語で言えば「インカーネーション」、「インカルナティオ」、「受肉」、それは「低くする」「くだる」あるいは「降下する」と色々な言葉で表現することができますが、自分の高さをかなぐり捨てて、より低いものに自分の身を沈めていくこと、それが今日の箇所では中心的なメッセージの一つとして語られているのではないかと思います。106

（アイデンティフィケーションは、この二重の意味をもつと考えられる）

第5節、

「神は、私たちが語っている来るべき世界を、天使たちに従わせるようなことはなさらなかったのです」

今、私たちが読んでみると、どうも何のことかよくわからない部分です。

「来たるべき世」というのは、私たちが絶えず覚えている「イエスがご支配なさる時」、「主のご支配が完成する時」、という風に捉えていただいてもよいと思うのですが――。

（天使に影響を受けていたヘブライ人）

ペルシャの時代は、オリエントの宗教観の影響を大変強く受けて、「世界が天使たちの支配下にある」という思想がありました。

言い換えれば、「今の時代」は天使の支配の時代であって、例えば、その天使が・・多少根性の悪い天使が中心になって、世の中を支配すると混乱が起きる、あるいは神の前に許可を得て人を苦しめようとする天使が、ある人間に関わると、ヨブのように本人にはわけのわからない苦難に遭遇する、というような発想がこの時代にも大変強くあったように思います。

そういう影響を受けて、天使による世界支配というような発想がユダヤ教の中にも広まっていきました。そういう思想を持ったユダヤ人たち、ここでいうヘブライ人たちが、この手紙の受信者たちだと考えられるわけです。「今の時代」は天使たちが支配している時代かもしれないけれども、「来たるべき世」、即ち「主がおいでになり、世界支配をなさる時」には、もはや、それは天使たちの支配下には決して置かれてはならないのだ、ということをもまず最初に述べるのです。107

「新しい時代、主の来り給う時は、今とは全く違った新しい時代の到来になる」ということを告げようとしていると言ってもよいと思います。そういう発想がユダヤ教の中にあっただかどうかは様々な学者が論議していますが、少なくとも私たちはそういう発想があったということを認めざるを得ない証拠がたくさんあるのです。

例えばダニエル書の第10章の中には、明らかに守護天使的な天使の存在が語られています。王の命令に従わなかったために、熱い炉の中に3人の若者が投げ込まれた、そうすると天使のような者が一緒になって歩いていて彼らを守っていたという記事があるのです。

これは明らかに三人に対する守護天使という思想がそこにあったわけで、護る者があるという大きな思想的前提の中でこの言葉は語られているわけです。

しかもそれを聴いた当時のユダヤ教の人々が、そこで少しもそれはおかしいと感じなかったということは、ユダヤ人たちの間でそういう発想は十分にわかり得る、納得できるものとして行き渡っていたのだ、ということになるだろうと思います。

例えば、守護天使という形とは多少違うかもしれませんが、神と私たちを結ぶ間に天使がいるという発想は、創世記第28章、「ヤコブの梯子」という神のまぼろしの中にも出て来ます。天使が登り降りしていたという形で出てくるわけです。天使の存在というものは、今私たちはとかく、それはくだらないとか、偶像だとか言いますが、ユダヤ教の中では、ある程度大事なものとして考えられていたということは想像できます。ですから新約聖書の時代になっても、ユダヤ教からキリスト教に改めた人々、「改宗者たち」は未だこういう天使の概念を持ち合わせていたのです。

だから、主がおいでになった時、即ち、新しいキリストの時代は、もはや天使たちが無効になる時代なのだということを言わなければいけなかった。それが5節でこんな言葉で書かれている理由だろうと思います。

「少なくとも『天使たちを通して語った』という表現で『律法』を提示しました」と。

確かにあなたがたが生きて歩いてきた歴史の中では、天使という存在を想定できるような状況であったかもしれない。しかし、キリストがおいでになった後、しかも十字架にかかり復活なさってから後の歴史、ましてや、天に上げられ、再びおいでになってから起こる新しい時代は、もはや、天使が働く余地を残した時代ではないのだという考え方を指し示すのに、一方的に当時のユダヤ人たちの発想を否定することなしに、その上に新しく植えていこうとしました。ある意味ではこうした寛容と忍耐の記録が、「来るべき世は天使たちに従わせるようなことはなさらなかった」という形で表現している部分ではないかと思います。

本来ならば、「今」だって天使たちが支配している時代ではないと言いたくなるのですが、これを残しておいたことは、後で違うということを述べる時に大変都合の良い部分もあったのです。<sup>109</sup>

今現在の世界を眺めると、神が与えてくださった平和もなければ、キリストが与えてくださった慰めもなく、混乱があり、いさかひがあり、葛藤があり、そして搾取があり、抑圧がある。どうしてイエスが与えてくださった恵みが、すんなり通っていかないのかと彼らが問うてくる時、このヘブライ人への手紙の著者は「それはまだこの世が天使たちに委ねられているからなのだ」と答えます。それを「私たちの罪の時代」と表現しているのです。

新約神学に立てば、「私たちの罪がまだ完全な形で処理されていない時代」という形で語らなければなりません。勿論ヘブライ人は長い伝統と歴史の中で、ユダヤ教の信仰を堅持しているわけですから、それを全面的に否定することはイエスもなされなかったように、彼らの思いの中にある現実を、少しずつ神の方向に向きを変えていこうという営みがなされているのです。「それが実はキリストの忍耐であり、キリストの受難と結び付いていくのだということ」を語ろうとして、5節にこんな言葉を置いているのではないかと思います。(まさにアイデンティフィケーションですね)

来たるべき世、新しく来る時代は今とは全く違うのだと語っている。「来たるべき世」というこの言葉は、別な写本ですと「来たるべき都は」というような言い方で書かれていたりするわけです。

「神の国」とか「御国、天国」と呼ばれている概念と全く一致する概念で、この「来たるべき世」という言葉が使われているのです。そこでは「神のみむねが完全に全うされる、そういうところなのだ。『大いなる救い』が完成された状態が、来たるべき世にはあるのだ」という風にここでは言っているのです。110

このような世界は、もはや天使たちが手を出す領分ではなく、天使たちによって賄われなければならない必要は全くない、神お一人が支配なされば十分な時代がやって来るのだと述べられていて、そういう前置きをして、6節から後のところを語っていくわけです。

#### 第6節から8節前半

⑥ある箇所、次のようにはっきり証しされています。

「あなたが心に留められる人間とは、何者なのか。

また、あなたが顧みられる人の子とは、何者なのか。

⑦あなたは彼を天使たちよりも、わずかの間、低い者とされたが、  
栄光と栄誉の冠を授け、

⑧すべてのものを、その足の下に従わせられました。」

これはご承知のように詩編の8編5節から7節までの引証なのですが、今、私が詩編の方をじっくり読みますから、違っている箇所を見つけていただきたいと思います。表現は多少違いますけれども…

「そのあなたが御心に留めてくださるとは、人間は何ものなのでしょう。人の子は何ものなのでしょう。あなたが顧みてくださるとは。神に僅かに劣るものとして人を造り、なお、栄光と威光を冠としていただかせ、御手によって造られたものをすべて治めるようにその足もとに置かれました」

これが詩編なのです。

はっきり違いのわかるところはヘブライ書7節の「あなたは彼を（神ではなく）天使たちよりも、わずかの間、低い者とされたが——」という部分です。111

なぜこんな違いが出て来ているのでしょうか、これはヘブライ人への手紙の著者が自分で勝手に訳したのではないのです。これから述べようとする自分の理論を展開するために、「都合の良い方の聖書の箇所」を引証したのです。それは、「七十人訳のギリシャ語の聖書」なのです。その聖書の詩編8編ではこう訳されているのです。ですからそれをそのまま借りてきて、彼は自分が述べようとする意見をヘブライ書で述べているのです。

一体どこがどういうふうにならなっていたか、お分かりになっていただけたと思います。なぜ彼が七十人訳の言葉を選び、詩編との違いを際立たせ、ここであえて語ろうとしたのか、すごく面白い問題だと思います。

「神の前で全く無力で小さい人間を、神がその御業のために用いられる器としてくださった、こういうことを謙虚に受け止めながら、神を讃美する」のが詩編の姿なのです。ヘブライ語で書かれている詩編は、そういうことのために書かれているわけです。

「人の子」

ところが、ヘブライ書では「人の子」という言葉を「神の子=人間」としてではなく「神の御子=神」として捉えている。「あなたは彼を・・・」と言った時の「彼」は従ってイエスを指しているのです。

「御子を天使たちよりも低いものとされた」しかもそれは限定付きの「わずかの間」である。何をここで言おうとしているか大体見当がおつきになると思います。

しばらくの間ではあるけれども、イエスは天使たちよりも低い存在として、御自分の身を置かざるを得なかった。これはご承知のように「降誕から昇天に至るイエスの地上における生活は全く人間と同じになられた」という言葉をこういう形で表現したのです。

「天使たちよりも低い存在として、天使たちの守護や支配やあるいは導きによらなければ歩めない存在としてご自分のご生涯を進められた」のです。

私たちは「イエス・キリストの受肉」という問題を「人と同じ立場になって降ってくださった」という単純な言葉で語りますが、このヘブライ人への手紙の著者はもっと厳しく「神が私たちのために与えてくださる慰めや励ましの言葉を携えた天使たちよりも、更に低い存在としての立ち位置に置かれたイエスを私たちに提供なさった（但し、わずかの間）」と表現するのです。更に、神はそのようにして御子を遣わしてくださった、とどのように述べているのです。

ところが、「詩編」の中では、神は「私たちが神よりもわずかに劣るものとして」と書いてあるのです。「わずかに劣るものとして」というところで色々な解釈が生まれてきて面白いと思いますが、例えば「わずかに劣る」ということは、「他の被造物よりは優れている、その上に立つ者として私たちが造られたので、神よりわずかに劣るのだ」というように捉えている人たちが案外多くいます。

これは、私は聖書の正しい受け止め方ではないと思います。

というのは神に劣る者として人間が創られた、というこの「創られた」という言葉は、神と人間は本質的に違うのだということを前提にして言っているわけです。ですから、神との比較など本質的にできない、たとえ「わずか」であろうと、違っていることは、「絶対的な相違」なのだということを語っているのだと言ってよいと思います。ですから神と比較する他のものと比べて見て、少しは人間の方がましだと詩人が言ったのではないのです。神に比べれば決定的に劣ったものでしかない。<sup>113</sup>

神は憐れみをもって私たちが御自分の形に似せてお造りくださったという点で、「わずか」という表現が出て来ますが、「神の憐れみのゆえに、私たちは全く神とは比べものにならないにもかかわらず、神の権能を代行する恵みを与えられた存在として造られた」と言われているのです。

今、私が詩編の解釈をこのようにごたごたと申しているのは、ヘブライ人への手紙のこの部分こそ、著者が詩編8編を引証している理由がそこにあるからなのです。だからこの箇所は詩編をきちんと捉え直しておかないと本当には理解出来ないのではないかと思います。

結局そういう意味では、神との決定的な差異をもった人間の存在、比較する対象のない神との間にあって、比較をするとすれば、その差異はほとんど問題にならないほど決定的な差異なのだ、神に劣っている存在なのだ、にもかかわらず神はこの私たちが「わずかに劣る者」と見てくださって——というのは憐れみによって支えてくださって、神の権能を代行する者としてお立てくださったのだ、ということが「詩編」の中で述べられていることなのです。

けれども、この「七十人訳の聖書」の詩編8編によると、大分違って来ます。その「神にわずかに劣る」という言葉はそうではなく「わずかの『間』天使たちよりも低いものとされる」という形で捉えられる、時間的な問題になって来るのです。「人間」が「わずかの間」ではなく「人の子イエス」が「ある一定の期間」（守護が必要な赤子幼児として）「神に劣る（信従、服従する）」存在として、そればかりではなく「天使たちより更に低い立ち位置」となってこの世においでになった。そういう表現をあえてとっているのだと言ってよいと思います。

1章では、天使に対する御子の徹底的な優越性を語った著者が、2章のこの箇所で、御子イエスは、わずかの間はその優越性において、天使たちよりも低い位置をとられた。即ち、御子の御自分を低くされた姿、降下された姿、その姿が、このわずかの間でも、この御子は天使たちよりも低い立場に身を置かれたのだ、という言葉の中で表現しようとしている部分なのだと言っているわけです。

そこで、なぜ御自分を天使と同じ位置に置かないで、「もっと低くされなければならなかったのか」が述べられていくわけです。

「すべてのものを、その足の下に従わせるため」とありますが、これは非常に私たちが読むときに大切な部分だろうと思います。

6節から7節、特に盛んにふれているのは7節ですが、その部分で「人間のあらゆる弱さ、あるいは不完全さを御自分の身に負って苦難の道を歩まれたイエスの御姿」を「天使たちよりも低い立ち位置になられた」という言葉を用いて語っているのです。<sup>115</sup>

ところがこの御子の低さ、天使たちよりも低いというその御姿は、永遠に続くわけではなく「わずかの間」即ち「救いの御業が完成するまでの間続く」のであって「やがて御子が栄光と栄誉の冠を授けられる時、低さは除かれ、本来あるべきところの高い位置に御自分を置かれるのだ」ということ、ここでは「栄光と栄誉の冠を授け、すべてのものをその足の下に従わせられる」という言葉で表現しています。ですから、「イエス・キリストの受肉の問題、昇天の問題、再臨の問題をこの短い部分で非常に濃密な形で述べられている箇所なのだ」と私は味わっているのです。

そういう完全に罪を贖うという一つの思想がイエス・キリストの中にあるということ、ヘブライ人に訴えている。即ち「あなたがたがメシアであることを拒んでいるあの御方こそが、唯一のメシアなのだということはどうしても強調しなければならない、そしてそのことのゆえにイエスを受け入れてもらわなければ困る」という部分があるのです。

よく私たちは「イエス・キリストは私の救い主です、私を罪から解放してくださる御方なのです」と告白しますが、その時の「私の救い主です」という言葉の中に「イエスのメシア性」という事柄を本当に認めながら「私の救い主です」と言っているかということと案外そうではないのです。極端な言い方をすれば「イエスは『他の人のことは知らないけれど』私にとっては救い主です」という告白になってしまいます。

ところが聖書では「あらゆる者が膝をかがめ、あらゆる舌がイエス・キリストは主であると告白するようになるため——」とありますから、私の救い主だけではないのです。<sup>116</sup>

私がイエス・キリストを救い主として受け入れるのは、すべての人々がこのお方によって救われるという「イエスのメシア性」を受け入れることなのだ、というようではなければならない。その辺をくどくど語っているのですけれども、この部分ではそれが非常に強調されていると言ってよいだろうと思います。ですから、「ここでは、私たちの信仰そのものが一体どういう『質』のものなのかという、『信仰の質』が問われている箇所だとも言えると思います」（くどくど語ってくださること、身に覚えます）

もう一度この部分をまとめて申しますと、「高いところにいらっしゃった神の御子が徹底的な低さに落とされて再び高められる、そのそういうプロセスがここにはある。しかもそのプロセスは、決して自明の事柄ではないのです、当然そうあるべきだとは誰も思わない、あるいは外側の力によって、仕方なくそうさせられたのでもない、『御子御自身がそ



のような道を歩むことを決断し、選びとられ、行動なされたこと』なのだ」ということです。

「そのためには御子御自身の中にも苦悩があり闘いがあった。なぜならば高い存在が最も低い存在になることは、そんなに簡単にできることではなかった。その激しい闘いの一面がゲッセマネの血の汗をしたたせられた祈りであり、十字架上で『エロイ・エロイ・レマ・サバクタニ』と叫ばれた叫びに表現されているのではないか」。そのように私たちは見なければならぬと思うのです。117

勿論そういう立場を取らなくても、イエスの御言葉、ゲッセマネの祈りは有難がたいものですが、ただ有難いのではなく、それが高きにいます御方が低きに身を落とすための闘いであり苦悩の姿であった、本来あり得ないことをそこに造りだすためのイエスの決定的な闘いであった、そしてそのイエスの決定的な闘いなしには、この私は救われ得ないほど罪深い存在であったという部分が捉えられていかないと、イエスの十字架の意味そのものがわからなくなってしまいます。

その辺をいい加減にしておくと「だから私は救われた」と割合簡単に「だから」で結びつけてしまう危険性があると思います。「そう簡単には結びつかないぞ」というあたりが、この箇所で言われている「イエスはしばらくの間は天使たちよりも低い立ち位置に身を落とされなければならなかった」とわざわざ「七十人訳」を使ってこの著者が表現しなければならなかった意味ではないでしょうか。勿論このヘブライ人への手紙を書いた著者は聖書に精通している著者ですから、この「七十人訳」は旧約原本（ヘブライ語原本）とこの部分は違っているのは十分承知しているのです。わかっていながら、あえてそれを用いている理由は正にその辺にあるのではないかと思います。118

第8節後半、「すべてのものを彼に従わせられた」と言われている以上、この方に従わないものは何も残っていないはずですが、しかし私たちはいまだに、「すべてのものがこの方に従っている様子を見ていません」。御子はご自分の低さに甘んじることによって「すべての被造物を、足の下に従わせる権威を与えられました」と、8節の中で述べられていくわけですが、こういうイエスの決定的な自己卑下の姿は遂に死にまでも至る、これが十字架なのです。

勿論イエスは高きにいますお方ですから、十字架を経なくても救ってくださることはできます。しかし「私たちの罪の根っこ」を捉えるため、死ぬべき状態にある私たちを本当に御心に適う形で救うためには、御自分が刑罰死を経て、死に勝利せざるを得なかったのです。（もう一つのアイデンティフィケーションの恵みが胸に迫ります）

「私たちは本来死ななければならぬ存在である」という罪の認識が、時に欠落してないだろうかと思えます。言葉では「罪に死ななければならぬ存在である」と言うのですが、でも本当に自分は死んで滅んでしまわない限り、神の前に申し訳が立たない存在であるなどと、なかなか思わないのです。

割合簡単に十字架にすっと結びつけて「もう赦されているのだから大丈夫なのです。そのままでも大丈夫ですよ」ということに慣れてしまう。そういうイージーさを徹底的にここではノーと言って「自分を知れ」と述べているのです。

「救いが本当にわかるためには、自分の罪が本当にわからなければ駄目なのだ」

とこの著者は必死になって語っているのだと思います。119

(ヘブライ人への手紙の著者は当時のユダヤ人キリスト者の揺らぎつつあった信仰を立て直すために語っています。松山先生はそれ以上の熱心さで繰り返し繰り返し「救い」について、私に語ってくださっています。)

他の書簡の中ではイエス・キリストが最後のアダムになられたという形で、パウロは書いています。「イエスは・・・最後のアダムになられた」(コリントの信徒への手紙Ⅰ・15章45節)という、最後のアダムになったという言葉からでも、私たちはなんとなく罪の終わりになられたのだと受け止めてしまうのですけれども、「イエスが最後のアダム」にならなければならなかった理由は、実は私たちの不従順、不信仰、反逆のせいだったことを本当に自分のものとして受け止められないで、この言葉がずっと当たり前に使われたりするとすごく危険だと思うのです。「最初の人アダムは命ある生き物となった」と書いてありますが、最後のアダムは命を与える霊となったのです」(コリントの信徒への手紙Ⅰ・15章45節)

旧約聖書の思想の中には、一人の人間が、神から御旨を成し遂げることを命じられる場面がたくさん出てきます。ところがその人がそれに失敗すると、神はその代わりに人をお立てになって、その仕事を遂行させるという思想があるのです。これは旧約聖書をずっとお読みになるとお分かりになると思いますが、色々な人が立てられ、そして逆らって滅び、また新しい王が立てられて——という形で続いていくわけです。

あるいは、出エジプトにおいてモーセは神に従ったけれども、御言葉には従わない場面が何回かあった。そのことのために彼は神の誓われた約束の地に入ることはできなかった。しかし神は、カナンの地にイスラエルを導くという約束を遂行するために、モーセの代わりにヨシュアを立ててその後を継がせられた。これは神の言葉を完成するまでその責任を担って次々に代行しなければならないことがあるからです。120

ところが創世記の言葉を借りて言えば、アダムは神のお造りになった全被造物を支配し、管理し保全しなければならない責任が与えられ、また土地をしっかりと守ってゆかなければならない責任が与えられたのに、それを遂行できませんでした。

従って誰かが代わってやらなければならない。アダムによっては地はもはや呪われたものになった、神の秩序は破壊された、だから誰かが担わなければならないのだけれども、それを担える者は誰もいなかった。次々に現れて立てられた者たちも皆、神の御言葉、祝福を人々に分かち与えることができないで、つまずき倒れてしまった。それ以来、地は呪われたものになり続けた。

パウロはローマ人への手紙の中で「だからすべての造られたものが、神の子たちの出現を待ち望んでいる」と書いているのです。神を讃美したいと思って必死になって待ち焦がれている。しかし誰も現れて来ない。

そういう現実に対して、この責任を究極的に担うお方として、イエスが登場して下さるとすれば、神に逆らった人間の立場に御自分を置いて神のご命令に服従する以外に道はなかった。神のご命令に百パーセント服従することによってこぼれた神との関係を回復する以外に道はなかったということになるだろうと思うのです。

そういう「神の御言葉への従順」ということの結果として、イエスは全ての被造物に対して御自分の権能を、お振るいになることができる立場をお採りになった。この箇所で「救いの創始者」という言葉が使われていますが、この「創始者」という言葉について、ちょっと脇道にそれますけれど、バークレーという人がすごく面白いことを言っているのです。「創始者というのは勿論パイオニアと呼ばれる内容と異ならないのですが、次のように考えることが最も良いことではないか」と言っています。<sup>121</sup>

「創始者と訳されているこの言葉は、航海中に船が難破する、そして船客たちは溺れ死にそうになる。これを救うためには、誰かがいち早く岸まで泳いで行きロープを張り、それを伝わって岸に上がるようにしなければならない。その時一番先に海に飛び込んで岸までたどり着き、ロープを張って船まで戻ってくる、その役割を果たしたものを『創始者』と言うのだ」と言っているのです。

私たちは下手をすると岸まで泳いでいって「ここへ来れば安全だよ」と言ってそこへ立ち止まる、ところが自分が安全を確保した後、もう一度ロープを張って戻って行くことをしないのです。

「罪の世界にイエスが戻って来られる、そしてそこからもう一度神の国に導き上げてゆくためにおいでになるのが『再臨』なのだ」ということになるだろうと思います。

救いの岸に向かってイエスは既に泳いで行かれた、私たちもその道に従って泳いで行こう。すごく格好はよいのですが、そんな体力も気力も、難破した船の中で意気消沈した人たちにはないのです。もう自分の手や自分の力、自分の足で救われる道はまったくないのです。だからもう一度船まで戻ってきて、わたしのロープに伝わって歩いて行きなさい、と言って導き上げて下さるイエスのお力によって初めて、私たちは神の国に入ることができるのです。<sup>122</sup>

「すべてのものを、その足の下に従わせる」ということは威張り散らすことではないのです。「イエスの歩んだ足跡を共に歩ましめる」ということなのです。そういう意味ではこの言葉は私たちにとってはすごく大切な言葉だなと思います。この箇所は、私たちの潜在的な聖書知識というのが反って邪魔をして「ああ、これは十字架のことを言っているのだ、これは救いの問題なのだ」と言って（クイズを解いたような気分になって）案外ぱっと通りすぎてしまう危険性のあるところなのだとは私は思います。

ですから、こんなところで大変しつこく、くどくどと語っているわけで、そういう神の御子のお働きを私たちはしっかりと受け止めていかなければいけないと思います。

(くどくどと語ってくださらないと分からない自分をつつめております。感謝。)

「私たち人間は神に何のために創られたのか」その辺が実は「救い」という問題の中では欠かすことのできない大事な問題だと思えます。

皆さんがよくご存知の旧約聖書、創世記の1章26節からちょっと読んでみます。ここは神が人間をお創りになったときの記録なのです。

「神は言われた。『我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう』。神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。神は彼らを祝福して言われた。『産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ』。これが神の与えてくださったご命令なのです。<sup>123</sup>

即ち、神が私たちに与えられた使命は、神がお創りくださったすべての被造物を足もとに従わせることだった。もう少し言い方を変えれば、支配することと、管理することと、保全すること、それが彼らに与えられた大事な使命だった。ところが、この地の統治者として神の代わりにそれを遂行するように造られた人間は、その栄光と誉の冠を自らかなぐり捨てた、そして罪の中に墮落していった。

創世記は興味が尽きない書物だと思えます。読み直せば読み直すほど面白いと思うのです。色々な権能を神は人間に付与なさせて——それを神の形に似せて、という形に表現していますが——私たちが造ってくださった。ところが人間は”神”のようになろうと考えた。神は御自分のように生きることを期待しておられたのに「神の思惑とはまったく違った神のようになろうとした」、言い換えれば「保全したり、養ったり、支えたりすることではなく、思いのままに動かす、自分の都合のいいように造り変えることこそ支配だと考えるようになった」そのように考えたのは知恵の木の実を食べたからだといわれます。知恵の木の実を食べたというところで、聖書はすごく面白いことを書いているのです。

「彼らはこの木の実を食べると、目が開けて、自分たちが裸であることに気がついた」これは聖書のもっている最高のユーモアだと思うのです。

神から色々な身にまとうべき力を与えられて人間は造られたのに、「神の知恵によらないで、自分でやってみようと思ったとたん」に「彼らは裸であることに気が付いた」とあるのです。何もなくなってしまうと書いてあるのです。何もなくなるのは当たり前なのです、もともと「土の塵」なのですから。<sup>124</sup>

創世記を読んでいく時に、どうしてこんなことが起こったのだろうか、なぜ蛇がいたのだろうかに関心が向いてしまって「裸だった」あたりを余り考えなくなってしまう発想が、その辺にあるのではないかと思います。結局、「それまでは神の恵みの中に生きていましたから、裸であったのに裸であるとは思わないで過ごせたのです。無一物であり何も力がなかったのに、神の恵みによって力があるように自分で思って生きることが許されていた」

しかし、自分の力で生きてみようと考えた途端に何の力もないことに気が付いた。そこでごめんなさいと言えばよかったのですが、何故あなたはこんなふうにしたのだと文句をいうわけです。「神様、あなたは私を裸にしたので、恥ずかしくてあなたの前に出られないのです」。私が悪いのではなくて、あなたが悪いのですというわけです。初めから人間はそういう発想で神と出会っていたのだなということがあそこを見るとすごくよくわかるのです。

「こういう傲慢さ、このヘブライ人への手紙の第2章5節以下で書かれていた「イエスの降下の道」とはまったく逆な傲慢な姿、高ぶっていく姿、そういう姿に神は激しい怒りをお感じになり、彼らを楽園から追い出した」と書いてあるのです。<sup>125</sup>

この犯した罪のゆえに初めの栄光と誉の冠を奪われ、見る影もないみすぼらしい姿で彼らは被造物の前に立たされたのです。栄光も栄誉も権能もなくなって、見る影もなくなって立っている、にも拘わらず、尚も、そりかえて被造物の支配者のつもりで立っている人間の姿、というのは今日になっても少しも変わっていないのです。

「そのことがどんなに環境破壊を起こし、民族差別を起こし、あるいは混乱を起こし、世界の破滅を招いているのでしょうか。やはり人間が神から委ねられた支配の権限を、『裸のまま行使しようとしているから』、起こってきていることなのではないでしょうか」

「その裸の罪を贖ってくださるために、イエスは裸で十字架にかかれ、お前たちの裸はここで終わりなのだ、「わたしを着なさい！」とお告げになられた。でも私たちは裸のまま支配者でありたいと考え続けている。人間は栄光を失ってしまったけれども、神から初めに与えられた栄光の痕跡を求めて統治者としてのプライドによりすがり、それを振りかざして地を支配しようとする。」そんなことが今日のところを読んでいきますと、すごく強く思わしめられるのです。<sup>126</sup>

神の所有である土地、カナンに入った時にヨシュアに対して神が「この地はわたしの聖なる土地であるから、あなたの足から靴を脱ぎなさい」とお命じになった。

「謙虚さ」、これは神の所有であるということに対する謙虚さ、それを求められたのですが、今私たちにはそんな謙虚さはまったくないのです。土地は自分の物のような顔をして切り売りし、混乱を招いている。我が物顔をしてその所有権を主張している。そして天にも届くような高い塔を建てて、私たちの文化はこんなに素晴らしかったと、かつてイスラエルの人々がやらかしたように、今の人間も同じことをやっているのです

ですから、「創世記」を今の時代の真っ只中で読んでみると、「今これが起こっている」のではないかと思う程に現実と符合しているのです。それが「罪」なのです。神はそのどうしようもない手のつけられない人間を救おうと決心なさる、これはすごいと思います。

普通だともう手が付けられなくなったら自らの子どもでも、「もう私たちの手に負えませんか、どうぞよろしくお願いします」と言って矯正施設に連れて行ってあずけてしまおう。そういう親たちがたくさんいる時代です。

ところが「人間と同じところまで身を落として、そこから担ぎ上げて行こうと決心される神、これは並大抵のことではないのです」。(アイデンティフィケーションが繰り返されています)

私の家の近くに多少心がねじれた子どもを持っている母子家庭があるんです。自分が気に入らないと、その子は家庭内暴力を振るう、そうするとそのお母さんは急いで飛び出して私どものところにやって来るのです。「息子に殺されます。助けてください」  
そう言って逃げ込んできた彼女に、最初私が言ったことは「息子に殺されるなら本望じゃないですか」そうしたらすごくこわい顔をして私をにらむんですよ。127

「だってあなたが、あの子どもの親なのだから、あなたが助けなければいけないでしょう。あなたが助けてくださいと言ってしまったら、あの子は誰に助けられるのですか」と言ったのです。すると彼女はしばらくして「こわいけれど、それじゃ帰ります」と言って家に帰っていったんです。そうしたら息子も収まっていたということでした。

ある日、その息子に会って色々話を聞いたら、「自分がやっているくせに、俺にやるなと言うのは腹が立つ」と言うから「自分がやってくるくせに、俺にやるなと言うのは腹が立つと言うのは、何が腹が立つの？」と聞いたら「俺がタバコを吸うと『タバコを吸うな』と言う。そのくせ自分は吸っている」と言うのです。そのあたりは彼のわがままですから、タバコを吸ってはいけない年齢なのだから、いけないのだと言わなければならないのですが、彼の頭の中にはそんなことはないんです。同じ人間なのだから、お母さんがやるのなら俺がやったっていいじゃないかという気持ちがあるのです。  
そこで別の機会に彼女と会って話す時がありましたので「あなたね、息子さんにタバコやめろって言うのだったら、辛いだろうけれど1週間あなたもタバコを吸うな」と言いましたら、4日目位に「断煙しました」と言ってね、とうとう1週間吸わないで過ごすことができるようになったのです。その姿を眺めて、息子はタバコを吸うのをやめたのです。

同じ位置に自分が立たなかったら、離れた位置から物言ったって通じないのです。親子だってそうだと思います。タバコやめて欲しかったら自分もやめればよいのです。自分の生命が大事だったら子どもの生命も守ってやればよいのです。そうすればお互いの心はつながるのです。イエスはそうやってくださったのです。(何度も言いますアイデンティフィケーション)  
だから私たちと神の心がもう一度つながったのです。

私たちは、自分たちの方から神との関係を切って来たのです。そして、神はどうして蛇などを造ったのだ？、だからこの世の中にこんな矛盾が生まれるのだ。何で悪などが存在するのだ？。あなたが愛ならそのようなものは一切創らなければよかったのだ、などと言うわけです。正にこの息子と同じように。

そういう私たちに対して、いや、そういうものを創るにあたって、「それに感染しない方法はあるのだ」というのがイエスの荒野における四十日四十夜の闘いでした。十字架の上でのイエスの苦闘でした。

主はそういうことを一つ一つクリアしながら、幾らそんなことがあっても、それに耐え、それを乗り越えられる力をくださっているのです。神に従い続けるなら、神の子としてのあなたの名誉もあなたの地位も損なうことは決してないと、必死になって語ってくださいました。

強盗をやってどうしようもなくなって、十字架にかけられて、死の寸前にある強盗に向かって「お前はきょうわたしと一緒に天国にいるよ」とイエスはおっしゃる。赦される価値のない存在です。だから十字架にかけられたのです。その存在に対してイエスは「お前の価値はわたしが保証するよ」と仰っているのです。「救い」とはそれなのです。

もう駄目だ、すべての人から捨てられるのだ、皆から忘れられるのだという恐怖の中で、せめて私の名前だけでも覚えていてくださいと訴えた強盗に、いや「お前の存在はわたしが保証するよ」とイエスはおっしゃった。<sup>129</sup>

そういうすごい言葉をこの強盗に与えられ得たのは「イエスはその酷さの中に、御自分も一緒にお立ちになっていたから」なのです。これが、イエスが十字架におかかりにならないで、下から十字架を眺めている人で「お前はきょうわたしと一緒に天国にいるよ」と言っただけで強盗は有難がりもしないし、感謝もしない。ましてや救われっこないんです。

「同じ十字架にはりつけになったからこそ、イエスはその人を救うことができたのです。『その時に救われた強盗が実は私たちなのです』。その時十字架と一緒にいたのです、けれども自分は十字架にはりつけになどなっていないと思っている、それが私たちのもっている罪の深さなのではないかとそんなことをすごく感じます」（松山先生は悲しそうにしかし毅然としたお姿で私に語ってくださったと感じています）

自分が裸でありながら、かつて神から創られたその日の栄誉と栄光を自分由来のものであるかのように錯覚して地を支配している姿が、今世界の中に色々な問題を起こしています。富める国と貧しい国、あるいは自然破壊、あるいは自然破壊によって起こされる自然災害、生命を軽視した科学文明の発達から生まれてくる多くの人々の死、あるいは難病奇病の発生、というようなことは皆、私たちが作り出した「罪」なのです。

ところが私たちはそれを眺めて「神様、こんな矛盾があるじゃないですか、あなたの責任ですよ、どうしてくれるんですか」と平気で罵っているわけです。<sup>130</sup>

私自身が「悔い改めますから、どうかあなたの支配をもう一度回復してください」と祈らないのです。もっと住み心地の良いところに住めるようにしてください、としか祈らないのです。そういう私たちに対して、神はイエスを送ってくださって、私たちよりも、もっ

ともっと御自分を低い立場に置かれて、私たちを救ってくださった。そういうことがこの聖書の中で著者によって書き綴られているのではないかと思うのです。

## 第9節

ただ、「天使たちよりも、わずかの間、低い者とされた」イエスが、死の苦しみのゆえに、「栄光と栄誉の冠を授けられた」のを見えています。

神の恵みによって、すべての人のために死んでくださったのです。

第9節のところに来て、このヘブライ人への手紙の著者は初めて「イエス」という名前を書くのです。そこまでは「御子」と書いてあり、イエスという名前が出て来ないのです。ということは、神が徹底的に自己降下なさって、私たちの中に救い主として送り込んでくださったこの御方が、あの十字架のイエスなのだ、あなたがたがメシアとしてより頼んでいるのはあのイエスなのだということをもう一度力強く宣言しているのです。

イエスだからこうなったのではなく、「神の深いご計画が、インマヌエル『神共に在ます』というお方として、私たちの中にお宿りくださり、天から徹底的に低いこの世に降りてください、更に低いところに身を置いてくださった、死も苦しみも、悲しみも、嘲りも、裏切りも、すべての傷みを御自分の一身に負うてくださり、栄光をかなぐり捨てて裸にされた姿で十字架にあげられ、私たちの罪を贖ってくださった。その方がイエスなのです」と。そして、ここで初めてイエスという言葉を挙げていることに私は非常に興味を惹かれるのです。<sup>132</sup>

天使に勝る御子、それはイエスである。神の大きな救いの業に仕えるために、一度御自分を低いものに置かれ「御子の働き」に関心を向けさせた著者は、「その働きが、御子イエスによってなされたのです」と告げます。

当時イエスに対しては「ナザレのイエス」という言葉がしばしば使われていました。「ナザレのイエス」ということは、偉大な預言者イエス、神ではない「人間」なのです。自分たちの仲間イエス、傑出した力を持った指導者イエス、という形でイエスを受け止めていたのです。

十字架と復活という出来事を経てこの「ナザレのイエス」が、今やあなたがたの中で「ナザレのイエス」ではなく、「神の子」であることを正真正銘明してくださった。だから難破船上の私たちは、この御方によって向こう岸まで張られた救いのロープを頼りに、神の国へ向かって泳いでいこうではありませんか。

「神の恵みによってすべての人のために死んでくださった御子イエスは死の苦しみのゆえに栄光と栄誉の冠を授けられ」というように9節では書いています。

あの十字架を負ってゴルゴタの丘を登り、十字架の上に苦しみながら死なれたイエス、神の栄光と誉を与えてくださり、死を滅ぼす復活の生命を与えて高く引き上げてくださったイエスを（この受難節から復活節に至り、半月の間）深く覚え、また喜び、祝ってきたはずです。



「すべての人々のためにイエスは死んでくださった」

この言葉は、私たちが絶えず口にする言葉ですけれども、このイエスの前に、人種も国籍も、貧富の差も、権威も、様々のものが何一つ無用であるということの意味しているのです。

イエスの前に立つのには裸でよい。だからこそ「すべての人」という言葉は成り立つのです。何か資格を持った人、何か特徴のある人、そんなことはそこではまったく問題にされていません。十字架の前に立つ特別な立場などはないのです。十字架の前に立つのは罪に汚れ、弱さと不完全さを負う破れだらけの姿の私なのです。

十字架の下にひれ伏して「悔い改め」の涙を流し、その涙にぬれた顔をあげて、天を仰ぐ時、そこに私のために死んでくださった神の御子、死を克服して栄光と誉れをお受けになったイエスを見上げることができます。このような方法によらなければ、傲慢な思い、自己満足的な考え方や、自己義認の信仰などが打ち砕かれることがないのではないのでしょうか。

そしてイエスの歩まれた道、即ち、低い者に低い者にと身を置き換えながら、心を支えながら歩んでくださったイエスの道を共に歩もうとする時、私たちの信仰が真実に生かされて来るのではないかと思うのです。133

「私についてきたいと思うなら、日々自分の十字架を負ってついて来なさい」 (中略)

イエスの十字架を仰いで、イエスについて行こうという歩みが、あちらこちらで生まれたり、きっと「すべての人が救われる」というその「すべて」といううねりが、そこそこに起こって広がって世界を包んでいけるのではないかと思います。

すべての者がこの方に従う時、「大いなる救いの時」が一步一步完成に向かって近づいていくのではないだろうかとも思います。(中略)

今日のための準備を受難節から復活節にかけてさせていただけたことは、私にとってはすごい恵みであったと、皆様には心から感謝しております。(1996年4月13日)

## 写者ご挨拶

「ヘブライ人への手紙に学ぶ」の転写は私自身の信仰の立て直しを目的として始めましたが、試み始めますとそれが「大それた試み」「身の上知らずの無謀な試み」であり、それには「鳥肌のたつ怖さ」を感じました。正確に転写することもままならず、信仰の弱さのみならず、聖書の常識にもこと欠く自分に直面しました。そこで、無知を恥とせず、厚かましくも松山幸生先生の奥様清子夫人に相談いたしましたところ、日本基督教団峡南教会牧師・森容子先生をご紹介いただきました。ご多忙の中、9月23日ご面談頂き、校正のみならず、教理の解説、あるべき立ち位置を、ご教授いただくことをお引き受けくださいました。今回4回目になりますが、私は次のように森容子先生に感謝のお手紙を出させてい

ただきました。私信ではありますが、私の今の心情を率直に述べておりますので、ここに記し教友の皆さまにお知らせいたします。

今後も忠実な転写をいたします。この講述に参加された先輩諸兄姉の皆さま、「ヘブライ人への手紙に学ぶ」著をお持ちの皆さまには、時々転写に違いがあることに気づかれると存じます。カナ文字が漢字になっている等、ほんの少しの編集をさせていただきますことお許し頂きたく存じます。松山幸生先生の話される凜然とした雰囲気を保ち、その臨場から溢れるお力に応答してゆきたく存じます。1000頁に及ぶ大講述でございます。皆さまのお祈りを頂き貫徹いたします。どうぞよろしく願いいたします。（おはらやすお記）

森容子先生

2021/10/08

主の聖名を讃美いたします。

先生、本当に有難うございます。この貧しき者のために大いなるお助けを賜り御礼の言葉がありません。

一点一画見逃さず、相応しい括弧、句読点、私の数々の誤りを忍耐強く、お目通し頂いて、私の存在をしっかりと見守り、導き、励まし、お助け頂いておりますこと、真に光栄でございます。

今、つくづく思いますことは、「大それたことを始めた」「身の上知らずの無謀な試み」であったこと。そして感じていますことは「恐ろしい」ことを試みようとしている。畏怖の観念がなさ過ぎたと反省しております。

もし、森先生なくば、結果は大変なことになるところでした。

もし、森先生なくば、この作業は誤謬に満ちたものとして読まれてしまう可能性がありました。それを思いますと鳥肌が立ちます。

単に写せばいいという軽い思いつきで始めようとしていました。

しかし、正確に写すこともできない貧しい力に直面して、このまま進めば、誤った松山幸生先生を描き出す恐ろしい行為となりました。「主をなみする」ことになってしまうところでした。

ただ、小さな私の良心が芽を出し、というよりは私の無知が「何が主をなみすることなのか」の一節に1カ月以上留めおいてくれたのです。無知を恥とせず、厚かましくも行動に出て、松山清子夫人にお尋ねしたことが、全ての始まりでした。ご夫人のご紹介で森容子先生のご指導を賜ることができるようになりました。なんと大きな驚くべき邂逅です。このカイロスを与えてくださった主に感謝いたします。9月23日峽南教会を訪問させて頂きました折には、ご夫妻で長時間、暖かい雰囲気の中で主の御言葉を説き明かしてくださいました。

私は森先生の寛容と忍耐に感謝します。森先生の深い信仰、鋭い洞察力、優しさ溢れる牧会力、地域に親しまれ愛され伝道に力を注いでおられるお姿に尊仰しております。

森先生はご主人様とお二人で私の誤字脱字の粗稿を一文字一文字指で押さえて読んでくださっています。抜けることなくご指摘してくださいます。文の段落、括弧の形、「てにお

は」の修正、主語の追加等の形式ばかりでなく、私が理解できていない神学的な知識の加筆、松山幸生先生が言葉にされていない行間の意味を「一言の単語」を挿入するだけで、納得できる文章に仕上げてくださいます。「一文字の導き」に驚嘆します。

聖書は見かけは易しそうに見えますが、説き明かしなくして理解できるものではありません。特にヘブライ人への手紙は新約聖書と旧約聖書の橋渡しをする書簡で、紀元1世紀頃のヘブライ人の文化慣習を理解していなければ読み進めない所が多くあります。

しかし、この書簡ほど繰り返し重畳的に「十字架と救い」について宣べているものはないように私には思えます。

牧師の導きが絶対に必要な書簡だと感じます。私は自分のよちよち歩きの信仰を立て直す決意をした、その時に松山幸生先生の「ヘブライ人への手紙に学ぶ」に出会いました。

ひとりで読んでいけば、信仰が深まると思っておりましたが、あに図らんや「信」以前の「知」の貧しさに晒されることになりました。そして、無知のままに、すべてを受け容れてくださる森先生の前に裸で新しい着物を求めて原稿を送りました。

地方における牧師の働きは牧会だけでなく、地域社会とのおつき合い、建物の保全修理、環境対策等のお仕事があり、多忙な日々であることは、私には分かっておりましたので、校正のお願いはできないと考えておりました。しかし、先生は喜んでお引き受けしてくださいました。私は先生がどれだけの時間をこの粗稿に費やされるか、ほぼ予想はできません。それ故に、申し訳けなく、忝く、感謝の心で一杯でございます。

ご指導を無駄にせず、一回一回前に進み、先生ご夫妻のご負担を少なくすることに努めなければなりません。そのことを通して私の修業が遂行されると考えております。

ご迷惑は一杯お掛けすると存じますが、どうかこの貧しき信徒をお助けくださいますようお願い申し上げます。お励ましのお言葉、本当にありがとうございます。

先生ご夫妻の、そして教会の皆さまのご健勝をお祈りいたします。在主。

おはらやすお